

## 今から想えば

高校 20 期（1968 年卒） 早島 知雄

1965 年 4 月、高津高校に入学しましたが天王寺中学では水泳部に所属していたので高校でも何かスポーツをするなら水泳かなと思っていました。当時、1 歳上の兄が既に同校野球部に所属していて部活動の話を見ると水泳部は今風の言葉で云えば「ちゃらい」とのこと。ならばと思案していましたが偶々、野球部とハンドボール部は割と交流があり、仲が良いと云うことで勧められるまま何となくハンドボール部に入部することになりました。

練習風景を見学に行ったかどうかの記憶も余り無く、未経験の世界に入ってゆくことになりました。同期は大地、稲葉、井崎、坂本、清水、吉沢、松田、高津で高津以外は未経験者でした。良くも悪くも此の時が人生の分岐点の 1 つでもありました。

3 年間の部活動では仲間と苦楽を共にしたわけですが私自身、いちばん辛かったのは 1 年の夏の合宿でした。私はゴールキーパーをしていたのですが指導に来られる諸先輩は 1 1 人制時代の方が多く、連日サッカーのゴールを使つての練習が続き、瘡や擦り傷で満身創痍の状態になり、とても耐えられず、その後の夏季練習をさぼり、又そのペナルティーで過酷なうさぎ跳びを強いられ退部を決意しました。しかし主将の川上さんなどに説得され、秋に気まずい思いで戻り又、部活動を続けることになりました。

もう一つの思い出は大阪府の新人戦であわやというところまで勝ち進んだことです。

ノーマークのチームが 1 戦ごとに力を付け波に乗り 3 回戦で優勝候補の佐野工業を破り準々決勝でも難敵の豊中高校を破り、一躍、ダークホースの存在となりましたが、準決勝で都島工業に惜敗しました。しかしながら一方で「やれば出来る」という自信がついたのも確かなことでした。このことが無ければ大学ではハンドボールをしていなかったかも知れません。

卒業後、関学に進学しましたが、大学では部活動を余り考えていませんでした。それが、久岡さん、川上さん、玉井さんの因縁でハンドボールを続ける流れが決まっただけのように思います。ここも人生の大きな分岐点でした。当時、強豪であった関学はセレクションで実力のある選手を集め、関西 1 部リーグで常に上位争いをしていました。入部したものの、練習は高校時代とは比べものにならないくらい厳しく、レギュラーを掴むのはなかなか難しいかなと思っていました。又、3 年生の春には自分の不注意で左腕を大怪我し、その後、満足な競技生活を送れなかったことは悔やむところでした。しかし、高校時代から大学まで 7 年間の部活動でかけがいのない友や先輩と巡り会い、未だにお付き合いさせて頂いていることは私の貴重な財産でもあります。卒業後は大阪を離れ関東在住ですが、そのうちに一度、母校の OB・OG 会に出席し、皆様にお会いして思い出話を花を咲かせたいと思います。